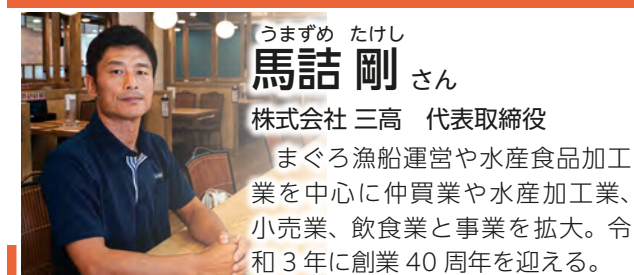


ボランティアは、
生活の、社会の一部になること。



「コロナ禍が終わりを迎えて、当時の支援目的が達成されたので「もう終わるのか」と話しましたが社員から「会社が良いければ続けたい」と言われました。提供開始当初はお礼の手紙をもらって、頑張るぞーなんて使命感に燃えていましたが、今では社員のほうが熱量を持って続けてくれています」。4年半前に始まった弁当の提供は、「コロナ禍が終わった今でも社員の気持ちを尊重して

長く続けてきたボランティア。ここまで継続できた思いを聞くと「ボランティアは自己満足。やらせてもらっていると思うから、見返りなんて求めていないし、逆に提供してほしいメニューを言っしてほしいくらい。それに、一過性で終わらず、生活の、社会の一部になつてから、ようやくボランティアと呼べるものになる。そういった思



うまづめ たけし
馬詰 剛 さん
株式会社 三高 代表取締役
まぐろ漁船運営や水産食品加工業を中心に仲買業や水産加工業、小売業、飲食業と事業を拡大。令和3年に創業40周年を迎える。

していたので、この機会に、地域貢献としてコロナ禍で生活が苦しい世帯に弁当を作ることを決めました」と当時を振り返ります。弁当の中身は、海鮮類を使った揚げ物などを中心に作られますが「提供当初は、クリスマスメニューとしてロブスターを入れたりしていました。やりすぎたかなと思って、途中からはエビフライとか、別のメニューにしましたけどね」とはかみず。



「続けていたもので、メディアの取材を断り続けていたら、誰も取材に来なくなつたと笑顔で自身の思いを語る馬詰さん。
「続けられる限りは頑張りたいと思う」。地域貢献をしたいという思い、社員の熱量で継続されてきたボランティア活動は、子育て世帯にとって生活の一部になつていました。そこには、支援する側と支援を受ける側、どちらも笑顔が広がり、幸せな空気が満ちていました。



支援する人も受ける人も。みんなが笑顔になる

コロナ禍から続く 思いのこもった こども支援

市内に本社を構える株式会社三高。「地域に貢献したい」との思いから、ひとり親家庭などに弁当を無償で提供するボランティアを行っています。今回は、同社のボランティアに対する思いに迫ります。



多くの観光客が訪れ、市民の台所でもある道の駅いとまん。その中にある「お魚屋みーかがん」では、週に2回ほど「販売しないお弁当」が作られます。同店舗を運営する株式会社三高代表取締役の馬詰剛さん（以下、馬詰さん）は「毎週火曜日と金曜日に、この店舗で50食の弁当を作り、市内のひとり親家庭生活支援事業者や市役所を通して、それぞれが決めた対象者に弁当を提供しています」と話します。

同社がこども支援を始めたのは新型コロナウイルスが流行し、社会に閉塞感が漂っていた令和2年5月。「私たちは糸満市の会社として地域に認められたいという思いを以前から持っていました」と話す馬詰さん。「私たちは『お魚屋みーかがん』のほか、糸満市物産センター遊食内、まぐろ屋みーかがんも経営していますが、コロナ禍当時は観光客も、飲食店に足を運ぶ市民も少なかった。設備も時間も持て余

皆さまからの

ご支援をお待ちしています。

糸満市では、すべてのこどもが生まれ育った環境に左右されことなく、自らの未来に夢と希望を持ち、こどもの健全育成を社会全体で支えるために、糸満市子どもの未来応援基金を設置しています。

皆さまからの温かいご支援をお待ちしています。

こども未来課 ☎840-8191